

多文化共生の 学校づくり

横浜市立いちちょう小学校

1 多文化共生の取組み

本校には、多数の外国につながる児童が在籍する(全児童の五五%)。そこで、児童が日本の文化や外国につながる児童の母文化を学ぶことを通して、日本人児童も外国につながる児童も相互理解を深め、互いに尊重して、共に生きようとする態度を育成するために、「多文化共生の学校づくり」を推進している。外国につながる児童も日本の児童も自らに誇りを持ち、一人ひとりが安心して生活できる学校づくりを目指している。

- ① 本校では、今まで積み重ねてきた実践により確かな、より体験的な取組みが実践できるよう昨年度次のような取組みをし、今年度も継続している。
- ② 多文化共生を目指した授業づくり
- ③ ワールドクラブ(母語、母文化体験クラブ)

③ 校舎内外の多言語表示

これらの取組みを通して、児童が、自分の国への愛着感や自己肯定感(アイデンティティー)を高め、互いのよさや違いを受け止め、共に学ぼうとする児童に育ってほしいと考えている。

2 具体的な取組み

① 多文化共生を目指した授業づくり(各教科・総合的な学習の時間)

各教科、総合的な学習の時間等で各学年が多文化共生を目指した授業実践を行った。多文化共生の授業実践では、歌ったり、踊ったり遊んだりする体験を行う「異文化理解」と、日本人と外国につながる人々が互いに住みやすい環境をつくるための「共生教育」の二つの柱があることを認識している。

◇一学年「いろいろな国の遊びで遊ぼう」(生活科)

国際理解の教室の先生より教えていただいたフィリピンのじゃんけんがきっかけとなり、クラスの友達との国のじゃんけんを調べて遊んだ。また、地域に関わる中国・ベトナムにつながる方々をお呼びし、歌や遊びを紹介していただいた。

◇二学年「お話大好き、お話いっぱい、こんなお話を考えた」(国語)

外国文学に触れる国語の単元において、いろいろな国の本を取り上げた。学習支援者に英語で読み聞かせをしていただいたり、ベトナムにつながる児童にベトナム語で読んでもらったりした。また、「スーホの白い馬」の発展として、内モンゴルにつながる保護者から話を伺ったり、馬頭琴演奏者を学校に招きモンゴルの方々の文化や思いに触れたりする等、貴重な体験をした。

◇三学年「みんなの国を知る」(総合的な学習)

運動会で取り組んだ「よさこいソーラン」がきっかけとなり、児童はクラスの子の友達の国々





の踊りも踊ってみたいという意欲や興味を持った。そこで、ベトナム、中国、フィリピンの講師を招き「踊りを通してそれぞれのよさを知ろう」という活動を展開した。

◇四学年「ベトナム野菜づくり」(総合的な学習・理科)

ベトナムの野菜を栽培しているお宅を訪問して児童は、野菜づくりにかける思いを取材し、ニガウリづくりと合わせてベトナム野菜づくりに取り組んだ。ベトナム食材の店に種を買いに行ったり、土づくりや水の管理など、多くの場面にかかわっていただいたりしながらさまざまな思いに触れることができた。学習のまとめとして

収穫した野菜を使った「ベトナム野菜パーティー」を開催した。

◇五学年「中国の切り絵づくり」(総合的な学習)、「世界の米料理」(総合的な学習・家庭科)

稲作の発展として、児童は、お米料理について各家庭での「お国自慢料理」について調べ発表した。授業では、日本の太巻きづくりに挑戦し、授業参観で保護者と共に試食した。

◇六学年「戦争についてくわしく調べよう」(総合的な学習)

地域に住む戦争体験者をお招きし、戦争の体験話を聞いた。クラスにいる外国につながる友達の多くも戦争を背景として来日していることに着眼し、地域の方々や保護者に聞き取りをしながら、自分たちのルーツである国々の戦争について調べまとめた。

②ワールドクラブ(母語・母文化体験クラブ)

「ベトナムを知ろう」と題し、地域にかかわるベトナムにつ



ながる講師をお招きし、母語でのコミュニケーションの取り方、遊びや食文化体験、歌や踊りなどさまざまな文化体験に取り組んだ。

③校舎内外の多言語表示・装飾づくり

毎朝、児童の登校時に校長・副校長が、「みんなの国のことば」で朝のあいさつを交わしている。また、子どもたちが自然と友達の国の言葉でコミュニケーションを交わすことができるように、児童の昇降口にコミュニケーションパネルと称する一〇カ国語の「おはよう」、「さようなら」、「いっしょにあそびましょう」、「ありがとう」のこぼれを掲示した。



「誰もが安心して過ごせる多文化共生の学校づくり」のためには、低学年のうちから、多文化に多く触れ、体験していくことが大切である。そのことよって国の違いによる垣根が低くなり、違いをよさとして理解したり、自分の国への愛着感や友達への関心を高めたりし、共に仲良く学ぶ児童に育つと考えている。

(文責:校長 金野邦昭)